

はい、一言祈って始めます。

愛する天のお父様、主の恵みに感謝いたします。

この時間私たち呼び集めてくださりありがとうございます。

今私たちの心を開いてください。

そしてあなたの御心をよく悟ることができるようにどうか助けてください。

全て感謝し、愛する主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。

アーメン。

おはようございます。

おはようございます。

今日のところは、今読んでもらったのが大体最初と最後になります。

29章の31節から30章の24節までになります。

この範囲を前半と後半に分けます。

前半が29章の31節から30章の13節までです。

そして後半が30章の14節から24節までとなります。

この箇所で何が言われているのかというと、大きくは、ヤコブの子供たちがどういうふうにして生まれたのかという話をしております。

後にイスラエルの12部族になっていく、その一人一人の子供が生まれております。

ただ、ここではそれだけではなく、このラケルとレアとの葛藤や、あるいはそれに対してヤコブがどのように対処したのか、そして最後には神様がどのように介入したのかという話もここでは扱われます。

では、前半の方を見ていきます。

まず31節から35節を読みます。

主はレアが嫌われているのを見て彼女の胎を開かれたが、ラケルは不妊の女であった。

レアは身ごもって男の子を産み、その子をルベンと名付けた。

彼女が「主は私の悩みをご覧になった。

今こそ夫は私を愛するでしょう」と言ったからである。

彼女は再び身ごもって男の子を産み、「主は私が嫌われているのを聞いてこの子も私に授けてくださった」と言ってその子をシメオンと名付けた。

彼女はまた身ごもって男の子を産み、「今度こそ夫は私に結びつくでしょう。

私が彼に3人の子を産んだのだから」と言った。

それゆえその子の名はレビと呼ばれた。

彼女はさらに身ごもって男の子を産み、「今度は私は主を褒めたたえます」と言った。

それゆえ彼女はその子をユダと名付けた。

そのあと彼女は子を産まなくなった。

この31節から35節までは、レアが産んだ子供たちの名前が書かれております。

31節に書いてある通り、レアは嫌われていたんですね。

ヤコブは、レアとラケルのこの2人の姉妹と結婚するんですけども、レアはずっと嫌われておりました。

そして、このレアは、子供を産むたびに、「自分が子供を産んでいるのだから夫は私のことを愛してくれるだろう」という期待をずっと持ち続けます。

この子供の名付け方に、彼女の気持ちが現れていますね。

ルベンに関しては「主は私の悩みをご覧になった。

今こそ夫は私を愛するでしょう」。

またシメオンについては、「主は私が嫌われているのを聞いてこの子も私に授けてくださった」。

またレビについては、「今度こそ夫は私に結びつくでしょう」。

私が彼に3人の子を産んだのだから」。

ユダは、「今度は私は主を褒めたたえます」と言った。

このように、レアは、自分が子供を産んで、そして子供を産むというのは当時、今もですけれども、すごく大切な女性の働きとして考えられていたので、「こういう大切な仕事をしているのだから、今度は夫は私のことを愛してくれるだろう」と、そういう思いをレアは抱き続けました。

ここから私たちが見て取ることができるのは、一つはやはり、神様がこのレアを憐れんだということですね。

このレアが嫌われているのを見て彼女の胎を開かれた。

この姉妹のうちで、お姉さんがレアですけれども、そのレアがぞんざいに扱われている、あまり大切にされていない。

そのことを神様はちゃんと見ていて、そしてレアを憐れんだ。

そしてレアに子供が生まれるように導いたということが、ここから見て取ることができます。

子供が評価される当時の社会において、子供を産むということは一体どういうことなのかな、というふうに思います。

女性が仕事をして活躍できるという社会ではなく、女性の仕事として、子供を産むということが非常に重要な仕事として考えられていた時代です。

これを現代風に考えると、もしかするとこういうことかもしれません。

例えば、子供を産んだ。そして、女性がどこかでバイトをしている。子供の送り迎えをする。そして家の色々な家事もする。子供が病気だったら、自分がやるべき仕事を一旦休んで、子供のケアをする。また、両親がいて、両親の介護が必要だったら自分も介護をする。

もちろん、家事全般もこなします。

こうしたことをたくさんやっているにもかかわらず、夫は全く見向きもしてくれない。

ちょうど、このような感じがするのです。

自分がやるべき仕事、ありとあらゆること、子供の世話も親の世話も、家計の足しになる仕事も、家事も全部やっているのに、夫は全く見向きもせず、評価もしてくれない。

こういう姿が、たぶん現代においては、このレアの姿に重なるのかな、というふうに思います。

そして、やはりそこには、すごく寂しい感じとか、あるいは悔しい思いというものもあるかもしれません。

これはそもそもの話ですが、のちのレビ記18章18節を見ていくと、同じ姉妹と結婚してはならない、ということが書いてあるんですね。

レビ記18章18節です。

「あなたは妻が活着ている間にその姉妹を妻とし、その裸を現わにして妻を苦しめてはならない」。

つまり、妻の姉妹と結婚してはならないという話をしているのです。

やはり、同じ姉妹と結婚すれば、そこで色々な嫉妬やライバル心などが当然出てきます。

そうしたことをあらかじめ防止するための意味が、このレビ記18章18節にあるのだと思います。

レビ記は、もちろんこのヤコブたちよりずっと後に定められた規則、律法になりますが、その律法が生まれてくる背景には、もしかするとこの創世記のレアとラケルのいきさつがあるのかもしれない。

ともかく、姉妹両方と結婚するというのは、非常にリスクが高いことなのです。

また、その中でヤコブは、レアに対してすごく冷たかったんですね。

だから、レアの方は「愛されていない」と感じたわけですが、これもヤコブの立場からすると、本当はしてはいけないことでした。

これも後の箇所になりますが、出エジプト記21章10節にこういう御言葉があります。

21章10節です。

「その主人が別の女を妻とするなら、先の女への食べ物、衣服、夫婦の務めを減らしてはならない」。

ここの、いわゆる重婚、複数の女性と結婚するケースですが、別の女性を妻とした場合でも、全ての妻を等しく扱わなければならない、ということが書いてあるのです。

その点でも、ヤコブはそれを怠っていたということが、このレアに関する記述から見て取ることができます。

まずこの点で、ヤコブは過ちを犯していたと考えることができます。

続いて30章の1節から3節を見ます。

ラケルは自分がヤコブに子を産んでいないのを見た。

ラケルは姉に嫉妬し、ヤコブに言った。

「私に子供をください。でなければ私は死にます」。

ヤコブはラケルに怒りを燃やして言った。

「私が神に代われるというのか。胎の実をそなたに宿らせないのは神なのだ」。

彼女は言った。

「ここに私の女奴隷のビルハがいます。彼女のところに入り、彼女が私の膝に子を産むようにしてください。そうすれば彼女によって私も子を得られるでしょう」。

この30章1節から3節のやり取りの中で、ラケルの状態、またヤコブの状態を知ることができます。

ラケルは、レアとは逆に子供ができませんでした。

ラケルはヤコブからは愛され、大切にされていました。

しかし、ラケルの方は子供を産むことができなかったのです。

そしてヤコブに当たり散らす、というのがこの30章1節から3節で見られることです。

また、ヤコブの姿もここで見るすることができます。

ヤコブは、ある意味では逆ギレして、「自分が神ではないのだから、自分の力で子供を産ませることはできないだろう」とラケルに対して怒っています。

このヤコブの姿を見た時に、この姉妹に対してどうしていいのかわからなくなっている、そういう状態に陥っていることが分かります。

レアはたくさん子供を産む、この時点で4人産んでいますが、愛されていない。そして「愛してほしい」ということをヤコブに訴えていると思います。

それに対してラケルは、ヤコブに愛されているけれども、子供が生まれない。そのことで、ラケルの方から文句が来ている。

そうした状況の中で、ヤコブはどうしたらいいのかわからずに、うろたえているような姿を見ることができます。

これもヤコブにとっては一つの訓練の期間だったのだらうと思います。

ヤコブは、お父さんお母さんのもとにいた時は、どちらかというと指示を聞く立場でした。

それに対して、この一つの家庭を築いている今、今度は自分が積極的に指示を出したり、関わったりしていく、そういう立場になっています。

そのように、ポジションが変わっているのです。

ここで、やはり問題というものが出てくるんですね。

今まではただ上の人の指示を聞くだけでよかった。そういう立場で、どう働けばいいかわかっていた。

そこから、自分が指示を出す立場になった時に直面する課題や問題は違うのです。

ヤコブは以前はただ指示を受けるだけでしたが、今度は自分も何か指示を出したり、働きかけていかなければならないようなポジションになりました。

そこでも、うまく人と対応することができない状況になっています。

言い換えると、ここでヤコブは、いわゆるマネジメントの苦勞を感じているのですね。

これは私たちの会社や組織など、色々なところでもあると思います。

ではレアは一体どういう存在なのかというと、レアもまた一つの組織、一つのチーム、一つのグループのメンバーですが、ヤコブからすれば、どうしても馬が合わない、感情が合わない、性格が合わない。

彼女の言っていることは分かるけれども、どうもスムーズにやり取りができない。そういう存在です。

それに対してラケルはどうかというと、すごく気が合う。チームのメンバーの中ですごく気が合い、やり取りしやすい。

でも、成果が上がらない、働きができていない。

そういうような人、と考えることができます。

その中でヤコブは、どうしたらいいのか分からなくなっているのですね。

これもやはりヤコブの訓練の期間だったと言えます。

また、このレアとラケルの状況を見ていくと、これは姉妹の戦い、姉妹の争いのように見えてしまいます。

しかし、ここではやはりヤコブが問題なのです。

さらに言えば、そもそもそういう結婚になるように導いたラバンの問題なのです。

最近ニュースなどで扱われたりしますが、一見すると女性同士の争いに見えるところの背後に、男性の問題があるのではないか、ということがよく言われます。

例えば、子供を出産したけれども一人で育てられず、赤ちゃんを捨ててしまうといった事件があり、若い女性が逮捕されることがあります。

その時、当然、子供が生まれるからには男性がいるはずですが、その男性の責任が全く扱われないことがあります。

また同じように、離婚して養育費が未払いで、女性の方が子供を育てるのが大変になり家庭が貧困になっていくというケースもたくさんありますが、その時も、養育費を支払っていない男性の問題はほとんど指摘されず、女性だけに責任が負わされてしまうケースがあります。

つまり、何か出来事があり、そこに男性と女性が両方関わっているのに、男性の責任が全く見えなくなってしまうというケースがたくさんあるのですね。

この聖書の箇所も、ずっと読んでいくと、ひたすらレアとラケル、この二人の姉妹が争っているだけのように見えます。

ところが、これは二人の姉妹が争っているというよりかは、やはりその中でヤコブが何もしていないことであったり、そういう二人が結婚するように導いたラバン、そのラバンが最も悪いのだ、というところが扱われていないという問題があります。

ともかく、ここでは、この状況の中で私たちが見るのは、レアとラケルだけの問題ではなく、その背後にいるヤコブの問題なのです。

そしてヤコブは、この自分の家庭に関して何も積極的にアプローチすることができず、ただうろろ、おろおろしていたという姿を見ることができます。

この30章1節から13節の間では、ラケルがまず、自分が子供ができないというので、自分の奴隷に子供を産ませます。

これは、以前アブラハムとサラが行ったのと同じようなやり方です。

そして、ラケルがその奴隷を通じて子供を産む。

それを見て、今度はレアが自分の子供を通じて子供を産むようにします。

このように、レアとラケルの対立がこの30章の中で、非常にエスカレートしていくというふうになります。

この中で、ある進学者が言っているのは、ここで足りないのは一体何かというと、祈りが足りないのだ、ということです。

実際そうだと思います。

ヤコブのお父さんであるイサクは、同じような状況に直面した時に神様に祈っていました。
それはどこかというと、25章21節です。

創世記25章21節です。

「イサクは自分の妻のために主に祈った。彼女が不妊の女だったからである。主は彼の祈りを聞き入れ、妻リベカは身ごもった。」

このように、リベカも、その上の代のサラもそうでしたが、皆不妊の状態がありました。

そして、リベカが不妊であった時に、イサクは祈ったのですね。

その結果、彼女は身ごもり、妊娠することになりました。

このようなプロセス、このような祈りが、この創世記29章31節以降には特にはないのです。

ラケルがヤコブに対して「私に子供をください」と、不妊であることの辛さ、子供が生まれないことの苦しみを訴えていた時に、ヤコブは「じゃあ神様に祈ろう」とはならなかったのですね。

これがやはり大きな問題として考えることができます。

私たちも、今までとは全く違う状況に陥ることがあります。

その時に大切なのが、このような祈りなのです。

はい。では続いて後半の方に移ります。

後半は30章14節から24節です。

まず、14節から16節を読みます。

「さて、麦の刈り入れの頃、ルベンは出て行って野で恋なすびを見つけた。そしてそれを母レアのところに持ってきた。するとラケルはレアに、『どうかあなたの息子の恋なすびを少し私にください』と言った。レアはラケルに言った。『あなたは私の夫をとってもまだ足りないのですか。私の息子の恋なすびまで取り上げようとするのですか』。ラケルは答えた。『ではあなたの息子の恋なすびと引き換えに、今夜あの人にあなたと一緒に寝てもらいます』。

夕方になってヤコブは野から帰ってきた。レアは彼を出迎えて言った。『あなたは私のところに来ることになっています。私は息子の恋なすびであなたをようやく手に入れたのですから』。その夜ヤコブはレアと寝た。」

ここで「恋なすび」というものが出てきます。

この「恋なすび」は、英語で言うと「マンドレイク」という植物です。

これは、聖書のギリシャ語訳であるセプチュアギンタ(七十人訳聖書)では「マンドラゴラス」と訳されているものの英訳です。

このマンドレイクは、根っこの部分が非常に特殊な形をしています。

人の形をしていたり、あるいは人の性器のような形をしていたり、そういった植物で、古くは古代ローマやギリシャの時代から地中海沿岸で知られていました。

そして、その根っこの形から、性欲を強めたり、子供が妊娠しやすくなるなどの伝承があった植物です。

また、いくらか催眠作用もあったようです。

ただ、このマンドレイクが、本当にこの聖書の箇所で言われている植物なのかどうかについては少し論争があります。というのも、マンドレイクはこのパレスチナの地域では育たないのではないかと、という説があるからです。

しかし一方で、物語の舞台であるハランは今のトルコの南部あたりなので、そこであればマンドレイクは育つのではないかと、といった議論もあります。

厳密にはよく分からないのですが、ただここで分かるのは、このマンドレイクが、子供ができやすくなるという作用を持つと信じられていた、そういう伝承があったということです。

何か魔術的な力があって、その植物を使うと子供ができる、という考え方が共有されていたことが分かります。

そのマンドレイク(恋なすび)を、ルベンが見つけたのです。
ルベンはレアの子供なので、つまり「レア側」で恋なすびが見つかったわけです。
それに対して、ラケルが「それを私にください」と言うのですね。
一番子供ができていないのはラケルなので、ラケルが「私にください」と言う。
それに対してレアは少し文句を言いますが、結論として、レアはその恋なすびをラケルにあげます。
そしてラケルは、ヤコブと一晩寝る権利をレアに与えるのです。
この「一晩寝る権利」をレアに与えるというところから、ラケルがどういうポジションだったのかが分かります。
ラケルはヤコブと非常に近いところにいて、ヤコブが誰と寝るのかを決める権限を持っていたことが、ここから分かるのです。
なので、創世記29章35節で「レアは子を産まなくなった」と書いてありますが、これはレアが単に自然に産まなくなったというよりは、おそらくラケルが、ヤコブがレアと寝ることを禁止していた、ということを考えることができます。
そして、この恋なすびをレアがラケルに与えることによって、その交換条件として「一晩寝る権利」をラケルは今度はレアに与えるのですね。

ところが、ここで私たちはその後の展開を考えると、当然こういうことを考えると思います。
「その恋なすびのおかげでラケルは妊娠するようになった」とか、あるいは「恋なすびを使ったけれどダメだった」とか、そういう話が続くことを、この話の流れからは当然予想します。
ところが、そういう話には全くなりません。
17節を見ると、「神はレアの願いを聞かれたので、彼女は身ごもってヤコブに五番目の男の子を産んだ」とあります。
これには、恋なすびは全く関係ありません。
恋なすびを持っているのはラケルなのです。
しかし、ここではレアが身ごもったという話が續いていきます。
このことから聖書が言わんとしているのは、つまりこういうことです。
「恋なすび」という魔術的な力を持つとされたもの、それは全く意味がない。
17節にある通り、「神はレアの願いを聞かれた」のであり、神様が願いを聞いて、神様が実現するのだ。
そうした魔術や伝承の話は全く意味がなく、神様が働いたかどうかが一番重要なんだ、ということ
を聖書はここで言わんとしているのです。
レアはここでイサカルを産み、またゼブルンを産み、ディナを産んだという話が21節まで続きます。

その後の22節になって、ようやくラケルの話になります。
「神はラケルに心を止められた。神は彼女の願いを聞き入れて、その胎を開かれた」。
これも、特に恋なすびのおかげで、ということは書いてありません。
もし恋なすびのおかげだったら、すぐに生まれているはずですが。
ところが、ここではイサカル、ゼブルン、ディナと3人の子供が生まれていった後で、ラケルは妊娠したという話になっています。
これもやはり、この箇所から聖書が言おうとしているのは、恋なすびには意味がない、そうした物には力がない、ということです。
本当に意味があるのは、神様がラケルに心を止められたこと。
神様が働き、神様が憐れみを抱いたこと。
そして神様の計画こそが意味を持つのであり、それがどんな伝承や魔術よりも力があるのだ、ということなのです。

これが今日の箇所全体の全体となります。

最初の方では、レアとラケルが争っているという話がありました。

その中で、ヤコブはどうしたらいいのかわからないという状況が続いていました。

そして後半、恋なすびの話になると、恋なすびを巡ってレアとラケルはやはり争いますが、結局は恋なすびには全く意味がなく、神様が意味があるのだ、神様の力が意味があるのだ、という話となります。

この全体を見た時に、私が一番強く思う御言葉は、詩篇の127篇1節、2節です。

詩篇127篇1節、2節です。

ここを読みます。

「都上りの歌。ソロモンによる。主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい。あなたがたが早く起き、おそく休み、労苦のかてを食べても、それはむなしい。実に、主は愛する者に眠りを与えてくださる」。

ここで、この詩篇が語っているのは、「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい」。

人間がいくら努力し、頑張っても、神様がそれを支えてくださらなければ、全くそれはむなしいものだ、ということです。

ここでは、それは本当に「無」のようなものなのだ、という話をしています。

神様の力によって支えられなければ、神様が守ってくれなければ、神様が色々な計画をうまくいくようにサポートしてくれなければ、人がいくら頑張ってもそれはむなしい、ということです。

人間が行う力は、それほど大きなものではありません。

神様が働かなければ、全くなくなってしまうようなものなのです。

しかし、神様が働いた時には、全てが出来上がるのです。

ヤコブはおそらく、このレアとラケルとの7年間の結婚生活の中で、本当に自分自身の無力を悟ったのだと思います。

自分がその夫婦の中、家庭の中がギスギスしているところで何もできないということを悟っていくことでしょう。

そしてまた、ラケルもレアも色々争い、恋なすびを巡っても争う。

しかし、そういう恋なすびなどで争ったけれども、それが全く無意味だったということも悟っていくでしょう。

このように、自分自身の力が足りないこと、またこの世で知られている、何か作用があるとされる薬や植物も意味がないということ、それを悟った時に、彼らが最終的に行き着いたのは、やはり「主」だということです。

全てのものが役に立たないと分かった時に、神様が本当に力があるのだと認めるようになります。

パウロが至るところで語っていますが、「神様を知る知識をみんなが持つことができますように」と言っています。

この子供を産むことに関して、色々対立があったり、苦しみを受けたり、そうした出来事を通じて、レア、ラケル、ヤコブが知るに至ったのは、やはり神様についてだと思います。

神様が全てを治めているということ、それを悟ったのだと思います。

これが、本当に私たちの歩みにおいても大切なことです。

色々な大変な時期をくぐってきましたし、またこれからくぐってくるのだと思います。

その中で、「これがいいのかな、あれがいいのかな」と色々悩むことも当然あるでしょう。

そして、うまくいかないということもたくさんあるでしょう。

その中で私たちが気づかなければならないのは、神様が一人一人を憐れんでいて、そして神様がご自身の計画の中で、最適な時を備えているということです。

そして、そうした神様が働いた時に、私たちは「ああ、神様だけが本当に全てを治めているお方なのだ」と心から主を褒めたたえる必要が有るということです。

神様が本当に最適な時を備えておられます。

私たちは、その神様の時をいつも期待しながら、そして歩いていくようにしましょう。

神様が本当にレアを憐れんだように、一人一人を憐れんでおられます。

神様にとっては、皆が中心なのです。

人間の目から見ると、ヤコブやラケルがこのファミリーの中心で、他の人たちはそれほどでもない、というふうに見えるかもしれませんが、神様にとっては皆が本当に大切な、尊い存在です。

そして一人一人に最適な時期を備えておられます。

その神様の時を信じながら歩いていく私たちでありましょう。

はい、祈ります。

愛する天のお父様、主の恵みに感謝いたします。

この朝は、このレアとラケル、そして子供たちが生まれるという出来事を通じて、神様だけが力を持っていること、それを教えてくださりありがとうございます。

ヤコブは、そのような家庭の中で、自分が何もできないこと、ただ怒ることしかできないということを悟ったろうと思います。

そして自分自身の無力さを味わったことでありましょう。

それを通じて、神様はヤコブを訓練しておられました。

そしてヤコブは神様を知るに至ります。

レアとラケルの方も、色々人間的な手段によって対立したり、問題を解決しようとしたりしますが、しかし全てを司っているのは神様である、と今日の箇所は教えています。

私たちも本当に、色々なことで試行錯誤したりしていく中で、神様だけが全てを司っておられること、そして神様が私を愛し、私に対する最適な時を備えていてくださるということを信じることができるように、どうか導いてください。

そして本当に神様を褒めたたえて歩むことができるように、どうか助けてください。

色々な葛藤の中で、ただ戸惑い、また怒るだけではなく、その中で何をしなければならないのか、それも悟る私たちとならせてください。

全て感謝し、愛する主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。

アーメン。